

第六回「文芸思潮」短歌賞 発表

第六回「文芸思潮」短歌賞に御応募くださり、まことにありがとうございました。今回は三五名七〇首と、前回に比して少なくなりましたが、全体に作品の質が高くなり、秀作・佳作の層が厚くなりました。日本の伝統に則った自然と人生とに和した短歌はいっそう深まりを加え、期待に応えていただいている印象を強くしました。厚く御礼申し上げます。

全応募作に対し、まず予選担当によって第一次、第二次、第三次の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、四月三十日、福田淑子・五十嵐勉両選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

残念ながら今回も前回に続いて最優秀賞は該当作がありませんでしたが、伝統短歌の流れに乗った作品が多数を占めたことは、賞としてのいつそうの前進を感じさせてくれました。予選落ちの作品も減り、この方向のうちにまた優れた歌が寄せられることを次回に期待したいと思います。

第七回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

(「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮)

優秀賞

石井和子

(和歌山県西牟婁郡)

斉藤肅江

(千葉県四街道市)

清水隆司

(千葉県松戸市)

華央子

(北海道茅部郡)

新井巳喜雄

(埼玉県児玉郡)

風間洋平

(新潟県新潟市)

奨励賞

野葛間

(長野県上田市)

佐山広平

(愛知県春日井市)

齊藤宏壽

(栃木県那須郡)

鈴木あぐり

(栃木県小山氏)

独活山強実

(福岡県田川郡)

海神瑠珂

(岐阜県郡上市)

宮脇すみれ

(神奈川県横浜市)

川端千津子

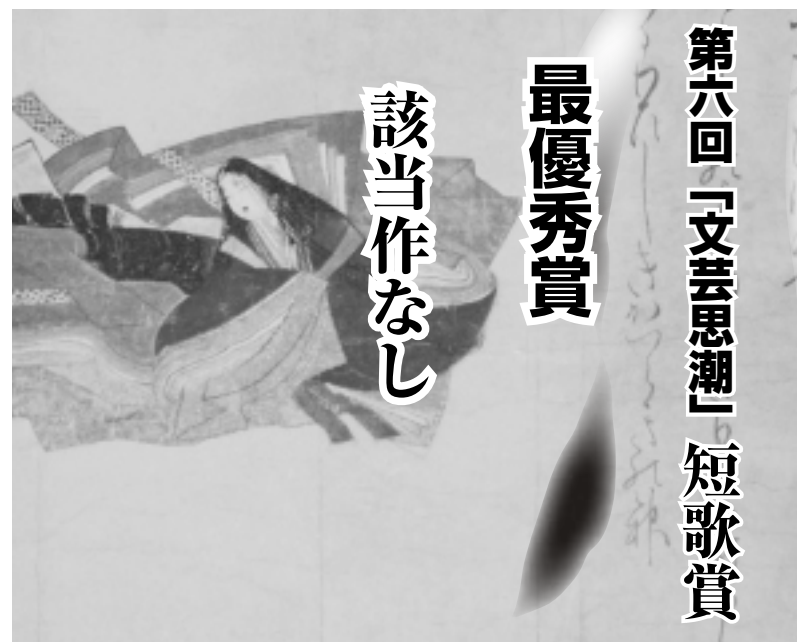
(千葉県四街道市)

岩谷隆司

(三重県亀山市)

最優秀賞

該当作なし



選評

向上深化の跡は明らか

五十嵐 勉

今回の短歌賞は残念ながらまた最優秀賞は出なかったが、全体にレベルが上がってきたことを感じた。特に持続的な応募者に進歩向上の跡が見られることは選考委員としてたいへんうれしいことだった。大手の新聞の歌壇の劣化、市販の短歌誌の浮薄化が著しく見られる現在、正岡子規の打ち立てた近代短歌の精神を反映した方向が応募作に見られるのは、喜ばしい限りだった。四季の移ろいをはじめとする自然の中で生活し、人の交わりの中で人間の命の感受の姿を見つめ、掬い取って、生きる力に再生していく言葉の行為は、実はとても重要なもので、それを基盤にしたものの上にこそ、豊かな実りの人生があり、未来の夢への翔りがあるのであって、それらを喪失しつつある現代にこそ、復活すべき大いなる意義がある。その方向にわずかずつではあるが近づきつつあることは確認できた。志は高くいつそうの実現に向けてこの短歌賞を持続させていきたい。

毎年応募してきてくれる石井和子氏は、今年も秀作を送ってくれた。

いう常用的表現に、緩いところがあり、この部分などに主體的な思いを込めた表現が加わると、叙景に加えて鮮やかな一つの生きた感受世界が立ち上がっただろう。

清水隆司氏の一首は切実な感情を訴えていて、迫ってくる。

「死にたい」と呟く母の背を摩り慰む言葉空に求むる

老いの果ての肉体の衰えに襲われての苦痛には、死を望む言葉の漏らしが確かにある。それを受け止めなければならぬ子供は逃げることでできない切実な状況に立ち会わされる。そのとき、天を仰いで助けを求め、救いを求めるその心のやり場には、痛切なりアリティがある。この一首で優秀賞になった。

同じく優秀賞の新井巳喜雄氏の歌は、これまで山村の過疎化の風景を歌うに留まっていたものだったが、人がいなくなっても山の自然の営みに目を注ぎ、懐の温かさやダイナミックな動きに目を開かれているのは、豊かな進歩として注目した。

山に入りわらび採りする早朝の両手にあふる春のぬくもり
春を告ぐ谷川の水の轟けり漲る鼓動山を揺るがし

これらは、人の存在に関係なく生起し、継続する自然の姿が押し出してきて、生命力を喚起してくる。こういう自

たましひに沁み入る声を降らせつつ二羽の白鳥いづこ指しゆく

山嶺へ段登り来て遅れ来るたましひ待つと樹に依りゐたり

魂連作とも言ふべき二首は、心の奥に届いてくる深い存在が確かにあり、それに触れることで生きる現在の自分の命が響き合う共鳴音がある。特に二首目は魂の分離のよう表現している手法に、それを待つことでいつそう深い魂との融合がある。ただ、どちらも「たましひ」という言葉を入れて歌を成り立たせている点にやや重複感と抽象性があり、その言葉を遣わないで、この歌想が表現できたら超一流と言えるだろう。

今回は年配の方々に特に優れた歌があり、初登場の斉藤 肅江氏の歌も注目された。

印旛沼よせ来る波のひたひたと朽葉重なる冬ざれの岸
墓に立ち経よむ僧の墨染めの衣に秋の小糠雨降る

「冬ざれ」は「冬の、草木の枯れて荒涼たる様子。また、その季節」の意。この情景描写には浮かび上がってくる映像性があり、それが冬や秋の趣の深さを湛えていて、一つの世界を伝えてくる。叙景は優れている。ここに人間の主体の何かが加われれば、さらに深まったゆるぎない歌になっただろう。よく読むと「ひたひたと」とか「墓に立ち」と

然への向き合い方を大事にしてほしい。機械によって浸食される現代の日常に対しては特に重要になる領域である。

華央子氏も直截に自然のシーンを描いて、生き物の息遣いのうちに命と向かい合う瞬間を確実に手にしている。

腰を引く猫の見つむる先見れば夕日に光る若鹿の立つ
若鹿の薄き耳朶陽に紅く母鹿を忘れてしばし草食む

風間洋平氏の米作についての歌は、米の高騰で悩まされる昨今、それらを振り払って原点に回帰するような新鮮な実感が溢れていて、すがすがしい気持ちになる。本来の米の生産に伴う共生の息吹が力強く感じられた。

植多終へし早苗の無事を語りつつさなぶり酒の酔ひの早まる
今年こそ一等米をと祈りつつ早苗植多行く機械軽やか
「さなぶり」とは田植え終了の祝い事で、このために酒を飲む。この酒用の種類もある。知らなかったが、いい言葉で、この言葉自体に魅力がある。

奨励賞にもいい作品がたくさんあって、心を洗われた。
遠き雪しのび泣く声たへまなく死目に会えぬ淋しさけぶる
連の響く貝殻ふるさとは螺旋の中に満ちくる潮

野葛問氏の歌は遠く離れた故郷の母に死に目に会えない悲しさが詠じられて胸を打ってくる。

佐山広平氏の作品は終戦時の時の隔たりの上に、焦土の絶望感と自身の足裏の痛みが重なって、そこから立ち上がっていく少年に壮途を想わせる出発感が宿っている。

晴れし日に焦土足裏に刺す痛み少年悲し荒地し歩む

齊藤宏壽氏の歌は認知症の母親の介護を題材にしている、訴える力がある。繰り返される同じ言葉に絶望感を覚えながら日々の中にまた新たな人間の絆が匂っている。

同じことまた問ふ母に同じこと答えて朝のコーヒー淹れる

もう一首は同時に孫への愛情が溢れていて、単純な構図だが、救われる思いがした。

今あらば児は裸足にて飛び出さん網戸を歩む大スクワガタ

鈴木あぐり氏も冬休み前の寒さを吹き飛ばすような子供の生き生きとした情景を描いて、快い躍動が感じられる。

風花にはしゃぐ児等の耳朶染まり足取り軽し冬休み前

独活山強実氏は山での生活実感が強く伝わってきて、そこに生きることの確かな命との対話がある。表現技術を鍛えれば、いい歌がたくさん生まれてきそうな気配がある。

たてつけの固き硝子戸開け放ち咲く山つつじ遺影に見せる

う漢字が当たっていることと、「ふくませる」という意味もあることを知ると、がぜん輝いてくる。「ふふむ」という音と「ふはり」という音が絶妙に響き合って、乳児の柔和さが匂い立つてくる。もう一首の駄作がなければ高く評価すべき作品だろう。川端千津子氏の名を記憶した。初回からずっと応募を続けている岩谷隆司氏にも進歩向上が見られる。やはり自然に目が向けられているのが成長の基盤になっている。

草刈りや刈れども刈れどもまた伸びる草の動きはわが身を励ます

その他佳作にも、もうちょっと言葉を選んでいれば、と惜しまれる作品がたくさんあった。もう少し推敲して直せばいいのという歌も少なくなかった。

しかし歌で大事なものは、そこに込められる思い——歌想である。歌想そのものの内容が深く、高くなっている。それは今回の応募作を読んでたいへん心強く感じた。人生とこの現実は何を感じるか、それによって命の意味を深めていくことが、真の生きる力となる。次回も期待したい。

椎茸のほだ木並べる作業終へ憩ふ深山に冷氣湧きくる

二首目の「深山」は「椎茸のほだ木」と始まっている以上やや重複感があり、この言葉を遣わないでこの歌想を表現できたのもっと引き締まったいい歌になるだろう。

農業に根ざした作品にはやはりいいものが多い。自然そのものから育む力をもろう共鳴感はいかに励まし合う豊かな相を為す。海神瑠璃氏の作品にもそれを感じる。

水田になおも根付かぬ若苗を励ます如く陽光の射す

宮脇すみれ氏は、自身の体の生きている感覚を、親しみ馴染む音楽の世界からのメロディーに託して表現する。それは快い歌になっている。

受診終えシヨパンの調べロザミバス停までの迂回路抜ける
体調のことで心配があり、医師からの診断が良好だったことから、自然に体内から湧いてくる音楽にその喜びを委ねた素直な表現がいい。ただ、シヨパンでなければ伝わらないかは吟味してほしい。

ひとさじの重湯ふふみしみどり児を抱けば米の香ふはりと匂ふ
この歌は「ふふみし」という言葉がとつつきにくくて、すぐには良さがわからないが、「ふふむ」に「含む」とい



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTTプリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勧め
で短歌誌「美知思波」入会

佳作

本澤 章
井ノ口 皓
渡良瀬愛子
鎌形清子
風樹 茂
室町 眞
大石秀宣
葵井禎子
自由一花
遠藤雄介

入選

三日月李衣
尾崎厚子
瀧口洋子



《私》の中の深い井戸の水 を汲み取る歌を

福田淑子

今年もたくさんの作品の応募をいただいた。短歌の歴史は長い。現在は空前の短歌ブームといわれ、古今を通して名歌も秀歌も数限りなくあふれている。あらゆることが争いの種となりうる渾沌とした今日にあって、心が洗われ、魂を揺さぶられるような歌にぜひ巡り合いたいものだ。

日々の営みの中で絶望感や閉塞感、孤立感を持つことは少なからずある。心を開いて世界を見つめ直し、己の感性を研ぎ澄ます手段として、歌はよく機能する。悲惨な時代にも地球をめぐる自然は時に美しく、動物や虫は健気である。それらに感応して、叫びたいこと、記憶にとどめたいこと、辛いこと、懐かしいことを言葉で表現することができれば、孤独であつても社会から孤立することはないであろう。

韻律を持つ短歌の形式は入り口は狭いが入ってしまうと奥行きは広い。片言でもそのリズムで収めればコトバは歌のようになる。もちろん名歌であろうと努力する必要はない。それは後の人が決めること、私たちの歌は、この時代

の孤独な魂のひとつにでもそっと届けばいいのである。短歌の表現の奥は深い。深く入り込めば、多くの人に握り締めてもらえるような表現に辿り着くかもしれない。人の心に届く韻律を獲得するまで、地道にコツコツである。

まず、優秀賞の歌から。

たましひに沁み入る声を降らせつつ二羽の白鳥いづこ指しゆく
山嶺へ段登り来て遅れ来るたましひ待つと樹に依りゐたり
石井和子

北に還る二羽の白鳥が天涯を飛んでいく。二羽はつがいかもしれない。その行く先は何処だろうかと、白鳥の発するたましいに染み入るような鳴き声を聞きながら己の人生を白鳥に仮託して自らの行きつく先をも思いつつ見送っている。二首目は山嶺をなんとか登ってきたものの、我がたましひが追いついてくれない。空っぽの肉体にたましいが追いつくまで樹に依りかかってしばし休憩。ようやく我をとりもどしてほっと一息。離れ離れにならず、追いついてくれてよかった。たましい二題。人生と命を見つめ続けるこの作者ならではの妙味のある歌である。

印旛沼よせ来る波のひたひたと朽葉重なる冬ざれの岸
墓に立ち経よむ僧の墨染めの衣に秋の小糠雨降る
斉藤肅江

使い古して効果がない。どのような言葉を掛けたら母を絶望から救えるだろうか。空を仰いで答えを待つ姿が見えるようだ。

腰を引く猫の見つむる先見れば夕日に光る若鹿の立つ
若鹿の薄き耳朶陽に紅く母鹿を忘れてしばし草食む
華央子

若鹿がテーマの歌二首。猫にとっては鹿は脅威なのだろう。もちろん体も大きい相手であるから逃げるが勝ちだが、腰を引いて様子を見ている猫の気持ちはいかなるものだろう。また、作者はその猫の姿から夕日に光る若鹿に気が付いてその美しさに惚れほれと見入っているのだろう。その入れ子のような視線の重なりが面白い。二首目の「母鹿を忘れて」というところに、若鹿の成長とそれを見守る母鹿の眼差しも感じられて、温かなものに包まれる。

山に入りわらび採りする早朝の両手にあふる春のぬくもり
春を告ぐ谷川の水の轟けり漲る鼓動山を揺るがし
新井巳喜雄

わらびを採るのは五月ごろと聞く。いよいよ山にも春が来る。とはいえ五月の山の朝はまだ寒く、水も手を切るような冷たさではないだろうか。しかし、わらびが出てくれば春である。わらびを採れば、両手には春のぬくもりが伝

一首目は印旛沼の茫漠とした湖水の岸に波が寄せ冬の朽ち葉が集まっているという叙景の歌だが、それはえも言われぬ寂しさがひたひたと音を立てているかのような景である。二首目はお墓の前で経をよむ僧の姿があり、その僧衣に小糠雨が降りかかっているという光景をそのまま描写した歌であるが、読経を聴く参列者の思いが秋の寒々しい雨の降る中で僧の読経の声とともにしみじみと伝わってくる。「墨染めの」が効いている。白黒の世界が亡き人を悼む哀切感を引き出している。言わずもがなの心の裡が伝わる叙景歌の力を存分に發揮して万葉集由来の歌の力を感じさせる。

朽ちた木にひとつ残りし柘榴の実蟻に屠られ血を滴らす

「死にたい」と呟く母の背を摩り慰む言葉空に求むる

清水隆司

心の痛みの伝わってくる歌である。朽ちた木に果たして柘榴の実が成るのかという疑問も残るが、これは心象風景だとすれば痛々しい柘榴の実である。柘榴の果汁を血に見立てるほどに作者の心が痛んでいるのだろうか。二首目は身につまされる内容である。老いて自分のことができなくなるほど弱つてくると、周りに迷惑を掛けたくない一心でつぶやいてしまう言葉。それは傍らにいる息子の胸には刺さるだろう。辛そうな母を助ける術もない。慰める言葉も

わってくる。待ち望んだ春の喜びがわらび採りを通して伝わってくる。二首目は、自然のたいなる力を感じる一首である。雪解けの谷川の水が音を立ててとどろき漲る様子はあたかも山を揺るがすようだ。臨場感が伝わってくる。そのとどろきは春の到来を告げているのだと。

植ゑ終へし早苗の無事を語りつつさなぶり酒の酔ひの早まる今年こそ一等米をと祈りつつ早苗植ゑ行く機械軽やか

風間洋平

「令和の米騒動」などと揶揄され、米の流通が話題になる昨今、わが国の稲作の歴史と、農民の苦悩と喜びに思いを寄せて、我々が瑞穂の国の民であることに思い至る情景が読み込まれていて、成り行きを憂慮するだけの米の消費者にも、ぐっと感じ入る歌である。

次に奨励賞の歌から。

遠き雪しのび泣く声たへまなく死に目に会えぬ淋しさけぶる

野葛間

大切な人の死に目に会えなかった悔いと悲しみは、いつまでも消えないものであろう。雪の降る寒い日に遠くで亡くなった方への思いが、まるで白い雪のようにつかえている。身につまされる心情が白い雪の奥に見え隠れする。

みると、いっそう味わいが出てくると思う。

ふる里や山仰ぎつつひとり往く木の下闇に影を奪はれ

鈴木あぐり

「木の下闇」は夏の季語であるが、うっそうとした夏の山の木陰の中に抱かれてふる里の山道をいく姿に様々な心情を思い描ける。

椎茸のほだ木並べる作業終へ憩ふ深山に冷氣湧きくる

独活山強実

陽の当たらないところで椎茸は栽培すると聞く。ほだ木を並べるのは秋から冬にかけてのこと。その体力のいる作業を終えて一息つくとうやく山の冷氣を感じて、汗を流した体を癒してくれる。山奥の作業に立ち会っているような臨場感がいい。

水田になおも根付かぬ若苗を励ます如く陽光の射す

海神瑠珂

田植えの後、どの苗もしっかり根を張るわけではなく、中にはなかなか根付かない苗もある。そこに「あきらめるな」と励ますごとくに陽光が射している。それは作者の思いの投影なのだろう。作者のそんな切実でやさしい思いがこちらに素直に伝わってくる。

晴れし日に焦土足裏に刺す痛み少年悲し荒地し歩む

佐山広平

昭和二十年、天皇によって大東亜戦争の終結が伝えられ、日本は敗戦を認めた。瑞穂の国であるはずの国土は焦土と化し多くの兵士と国民が命を失った。その時を迎えた多感な少年たちの心の痛み、衝撃は並々ならぬものであったと拝察する。当時軍国少年だった後の政治学者丸山真男しかり、児童文学者の山中恒しかり、それは枚挙にいとまがない。作者もそのおひとりであったのだろう。あれから八十年の歳月が流れたが、足裏を刺す痛みはどのようなものだったのか。これまでの歳月をどのように歩まれたのか。連作でその具体を知りたくなる歌である。

同じことまた問ふ母に同じこと答えて朝のコーヒー淹れる

齊藤宏壽

少し認知の怪しくなったお母様とのやり取りだろうか。毎朝同じ時間に同じ質問をなさるのかもしれない。「また問ふ」の「また」が効いている。それに対してこちらも同じことを返して、いつも通り淡々と朝のコーヒーを淹れる。この場合は「おなじこと応えて」という漢字を用いることも可能。コーヒーも「入れる」と「淹れる」があるが、どちらも可能。作歌の過程で色々と表現の試行錯誤をして

受診終えショパンの調べロザミアバス停までの迂回路抜ける

宮脇すみれ

「ショパンの調べ」は作者のお気に入りのフレーズ。それだけで、ほっとした気分が伝わってくる。受診の結果は悪くなかったのだろう。帰りのバス停までは、本道ではなく「迂回路」。それもよく効いている。鼻歌は人のいない通りでないと、気恥ずかしいもの。日常の一面面を切り取って、読み手の素直な気持ちがよく伝わってくる歌である。

ひとさじの重湯ふみしみどり児を抱けば米の香ふはりと匂ふ

川端千津子

赤子が離乳食を始める時、まず手始めとして大方は重湯を一匙飲ませる。そこで赤子は馴染んだ乳ではなく米の味を体験する。赤子が口に含んだ重湯の香りがふはりと香る。ただそれだけの場面だが、子どもにとっても親たちにとってもそれは大切な一步なのだ。「米の香ふはり」がいい。

草刈りや刈れども刈れどもまた伸びる草の動きはわが身を励ます

岩谷隆司

上の句は庭や畑を持っている人は、誰もが経験すること。「刈る」という動詞が三回使われていて、調子がいい

のであるが、そんなに必要かどうか。「伸びる草の勁さに
励まされる」という状況も、どこでのどのような作業なの
かという具体があればもう少し面白くなるのでは。推敲が
欲しい。

総評

老若男女を問わず、応募くださる皆さんの作品に織り込
まれている真摯な生活態度や瑞々しい感性には、いつも襟
を正す思いで読ませていただく。常連の方々の場合はすで
に旧知の友のようにさえ感じる。まだまだ意気軒昂、と安
心してみたり、どうしたのかなと、お声を掛けたくなる作
品もある。いずれにしても歌は生きもので、手から離れた
瞬間から、読み手側の懐にもぐりこんで手なずけられてし
まう容易ならざる生きものである。出来上がった作品を、
「こう読んでくれるはずだ」という思い込みを捨てて、辛
らつな「他者の眼」で見つめ直し、他者の懐を借りて育て
ていただきたい。「歌のことは巧みにして心追いつかず」、
「心深くしてことば及ばず」という試行
錯誤の繰り返しである。



福田淑子

ふくだ よしこ

1950 東京都生まれ

2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史
論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入
選

07「孤独なる球体」で第8回大西民子
賞受賞

18 第一歌集『ショパンの孤独』で第
13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門
優秀賞

第二歌集『パルティータの宙』

短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌
「まろにゑ」・現代短歌「舟の会」、歌
誌「コスモス」日本歌人クラブ会員、俳
句誌「架け橋」会員

